藤井達吉《梅百題》解題

土生　和彦

昭和三七（一九六二）年、藤井達吉によって制作された《梅百題》は、百二幅の掛け軸からなる、藤井晩年の代表作のひとつである。藤井が最も好んだ画題といわれる「梅」が、墨画、着色、漉き込み、蝋纈、継色紙等の様々な技法を駆使して描かれており、あわせて各画面には梅に主題を取った自作の歌が書き込まれる。当館では、本作を所蔵する愛知県美術館のご協力を得て、平成二三年十一月二六日から翌二四年四月一日までの期間を六期に分け、各期一七幅ずつ全百二幅を紹介する「愛知県美術館サテライト展示」を開催した。これを機会として各幅に書かれている前書き、歌、後書きをあらためて解読したので、ここにその成果を報告し、若干の考察を加えることとする。なお本稿では、画面に現れる様々な表現技法についてはあえて触れていない。各幅の技法については今後の課題として、別の機会を持ちたい。

前書き・後書き

前書きでは本作品《梅百題》について、これまで幾十年ふらふらと行き来した（＝あこがれし）梅の旅の思い出を絵と歌にて表わしたものであること、人に見せる目的ではなく自らの思いによって描くものであること、が表明されている。藤井の梅好きはよく知られていて、多くの梅を描いた作品が残されている。本作もそのうちのひとつとして、また制作時期から考えれば梅を求め続けた「旅」の集大成として制作されたものと受け取ることが出来るだろう。一方後書きを見ると、梅に加えて月への愛着が同時に述べられている。後にも触れるが作品後半の幅に月への言及が表れており、制作していく中で梅だけではなく月への思いも合わせて表現したくなったのだろうか。

百首の歌について

百幅に記された歌を見ていくと、全てが梅を題材にしていることは言うまでもないが、そこには色、匂い、盛る、なびく、散るという梅の様子から、見る、愛でる、思う、語る等々、梅に対峙した人の行動まで幅広く織り込まれている。藤井の梅に対する思いが十二分に表わされていることが感じられる。ここではその中でも本作に特徴的と思われる点について少し触れておく。

まず指摘できる特徴として、百首のうちの半数以上に地名または地名を推測できる内容が詠みこまれていることである。番号[2]に沿ってざっと書き出してみると、まず三から十五までは唐招提寺を中心とした奈良[3]、少し飛んで二十一から二十七は春日、東大寺周辺の同じく奈良が詠み込まれる。二十八、二十九は相模と伊豆の海、三十四から四十五までは東北[4]、四十六から五十九までは京都[5]、七十から七十三には東京の吉野村[6]が現れる。以降に地名の登場は少なくなるが、九十五に再び相模と伊豆が、九十九には大宰府が詠まれている。前書きの「梅の旅」についての記述とあわせれば、これらの土地は実際に梅を求めて訪れた場所であると思われる。

地名の頻度が減る後半の幅では梅に加えて「月」への思いが織り込まれる。番号で言えば七十三から九十四まで、中でも七十八から九十二にかけての十五首は二日月から十五夜までの月を一日ずつ詠んだもの[7]である。月は梅と並んで藤井の好んだ対象であった。本作においても、始めは梅だけであったものに月への思いも加えていくようになったことが推測される。ただし画のほうに月を直接描くものは、七十四の大きな三日月を除けばほぼ見当たらない[8]。全体の主題はあくまで梅であるということだろう。

はじめにも触れたように本稿では紙幅の都合もあり、画の部分についてはほとんど触れていない。藤井が同一画面の画と歌の関係を意識していたことは、紅白の花の色や雨、川、庭石など、画と歌がリンクしているものが多いことからも明らかであろう。ではいったい画を描く時にどの程度その画面に記す歌が想定されていたのだろうか。今後技法や制作の順序などの点も含めて検討を進めて行きたい。

梅百題につきて

（註）

1 《梅百題》の全文は、既に松尾信資編『孤高の芸術家　藤井達吉翁』（丸善　一九六五年）の中に収録されている。今回は本書も参考にしつつ、実作品に当たることで万葉仮名の同定もおこなった。

2 以下、番号は藤井が各幅に付したものを指す。

3 唐招提寺のほか、西ノ京、法隆寺、法起寺、法輪寺、飛鳥川、岡寺など。

4 地名としては、松島、瑞巌寺、中尊寺金色堂、陸奥。人物として（伊達）政宗、（藤原）秀衡、西行など。なお四十四の歌には具体的な地名はないが、前後の歌との関係や、池、舟遊びという言葉から、同じく奥州平泉の毛通寺の可能性がある。

5 寂光院、北野、修学院、桂宮、宇治、醍醐、（石清水）八幡など。

6 現在の東京都青梅市南部。江戸時代から梅の名所として知られる。

7 ただし十三日月の歌は八十九と九十に重複して記されている。

8 五十八にも月と思われる表現があるが、歌との関連性は薄い。

（付記）

文字の解読にあたっては、碧南市文化財課学芸員・豆田誠路、同じく文化財課・小島江里子両名の協力を得た。また、記録写真の撮影は文化財課・安藤里恵の手を煩わせた。記して感謝したい。

梅百題尓川支天

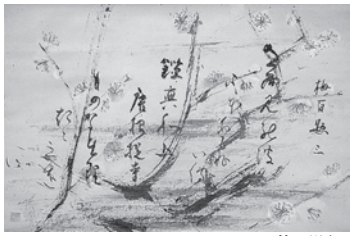
堂々　庭乃梅乃散支い傳奴連盤　幾十年加安己駕礼之　梅の旅遠於毛ひい傳□
拙き絵と　有堂止もつかぬ於母い傳を　筆の末ニ万尓所へし乃美　太礼尓見寸
へ起尓もあ羅傳　非止里保々惠無乃美　愚翁

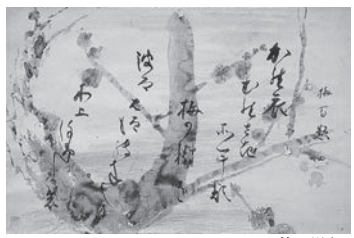
（　梅百題につきて

ただ、庭の梅の咲きいでぬれば、幾十年か憧れし梅の旅を思いいで□、拙き絵と、
歌ともつかぬ思い出を、筆のまにまに添えしのみ、誰に見すべきにもあらで、
独り微笑むのみ　愚翁　）

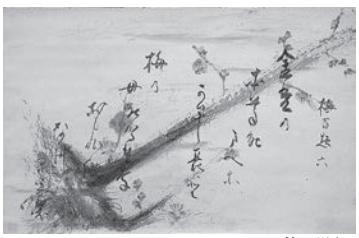
梅百題 1

梅百題 2


梅百題 3


梅百題 4

梅百題 5


梅百題 6

梅百題　一

加李乃い保　有面散支所め奴　う礼之可里計理　万遅尓萬知尓之　非東止勢那李起

（　仮の庵　梅咲き初めぬ　嬉しかりけり　待ちに待ちにし　一年なりき　）

梅百題　二

有面見礼盤　奈尓加おもは牟　遊へ之羅耳　堂々尓見轉遠李　な尓もおも波須

（　梅見れば　何か思わん　故知らに　ただに見ており　何も思わず　）

梅百題　三

有面見礼波　不東於も非い傳奴　鑑真和上　唐招提寺　もの駕堂理起々之遠

（　梅見れば　ふと思いいでぬ　鑑真和上　唐招提寺　物語り聞きしを　）

梅百題　四

加羅衣　む羅さ起所牟類　梅の樹を　波呂者呂も轉来し　和上許布し裳

（　唐衣　むら咲き初むる　梅の樹を　はろばろ持て来し　和上こふしも　）

梅百題　五

白能無免乃　衣も所礼止　語羅連奴　於毛へ盤　五十幾止勢　於も非出も可母

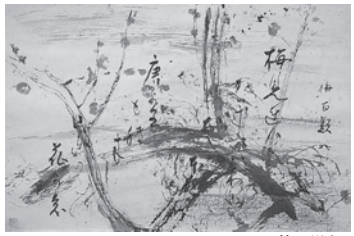
（　白の梅の　衣もそれと　語られぬ　思えば　五十幾年　思い出もかも　）

梅百題　六

金堂乃　本尊能万へ尓　可牟長登　梅乃母能駕堂李　於も非傳な川閑之裳

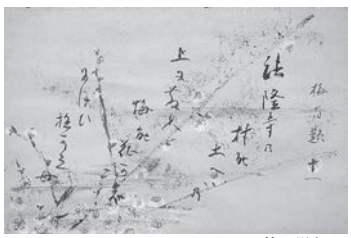
（　金堂の　本尊の前に　管長と　梅の物語り　思い出懐かしも　）

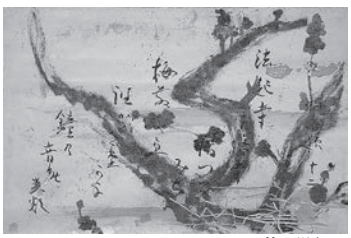
梅百題 7


梅百題 8

梅百題 9

梅百題 10


梅百題 11


梅百題 12

梅百題　七

登之遠へ轉　唐招提寺　も布天都母　梅乃おも非傳　団扇奈計見川裳

（　年を経て　唐招提寺　詣でつも　梅の思い出　団扇投げ見つも　）

梅百題　八

梅見連ハ　加牟真和上　おも本遊礼　唐与里も轉来し　己連乃花可裳

（　梅見れば　鑑真和上　思ほゆれ　唐より持て来し　これの花かも　）

梅百題　九

和駕久尓能　梅乃由迦梨　な川可し母　西乃京あ遊面婆　香能な駕礼来ぬ

（　わが国の　梅の所縁　懐かしも　西ノ京歩めば　香の流れ来ぬ　）

梅百題　十

千登勢あ満里　和駕久に尓さかへ志　梅乃花　和上おもへ盤　奈川閑之幾迦難

（　千年余り　わが国に栄えし　梅の花　和上思えば　懐かしきかな　）

梅百題　十一

法隆寺乃　村能土へい乃　上尓散久　梅能花可裳　尓保ひ遊可之母

（　法隆寺の　村の土塀の　上に咲く　梅の花かも　匂いゆかしも　）

梅百題　十二

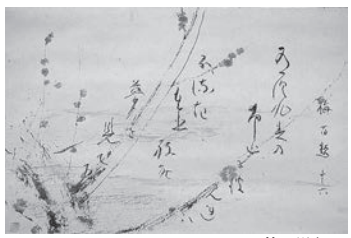
法起寺法輪寺　詣つ留み知尓　梅散支弖　誰駕有堂可与　鐘乃音能春類

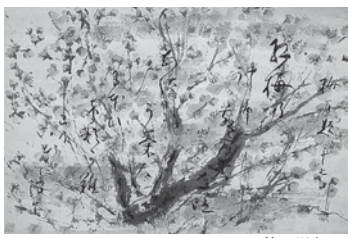
（　法起寺法輪寺　詣づる道に　梅咲きて　誰が打たかよ　鐘の音のする　）

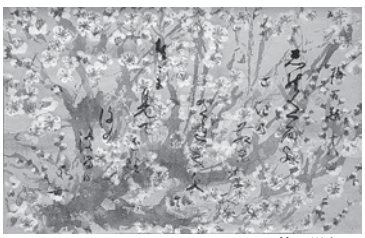
梅百題 13

梅百題 14

梅百題 15


梅百題 16


梅百題 17


梅百題 18

梅百題　十三

飛鳥川　可波所非尓遊計盤　梅の花　可波能な駕礼ニ　知里轉な賀類々

（　飛鳥川　川沿いに行けば　梅の花　川の流れに　散りて流るる　）

梅百題　十四

西能京　詣つ留寺々能　非呂尓波ニ　梅乃可本理乃　奈川可し支閑難

（　西ノ京　詣づる寺々の　広庭に　梅の香りの　懐かしきかな　）

梅百題　十五

岡寺能　美知乃許布し母　美地能へ尓　梅の可を里乃　悲止李安遊面類

（　岡寺の　道のこふしも　道野辺に　梅の香りの　一人歩める　）

梅百題　十六

有倶非春乃　布止尓波見連ハ　不流起堂悲祢能　夢を見てゐ起

（　鶯の　ふと庭見れば　古き旅寝の　夢を見ていき　）

梅百題　十七

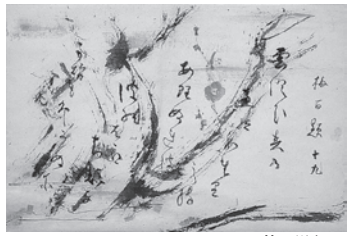
紅梅乃　計布散可李な理　あ佐日う氣天　尓本ひ希類可難　己乃い本に波尓

（　紅梅の　今日盛りなり　朝日受けて　匂いけるかな　この庵庭に　）

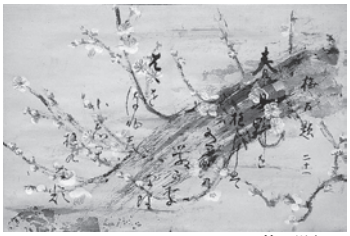
梅百題　十八

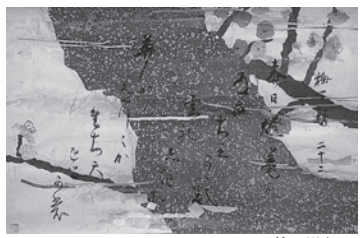
志羅有面与　さ起乃散閑李所　有連之支尓　堂ゝ尓見てを理　許の波留日所母

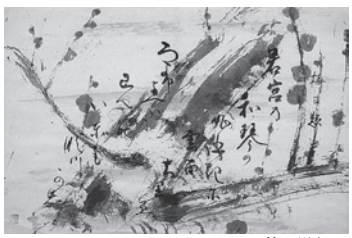
（　白梅よ　咲きの盛りぞ　嬉しきに　ただに見ており　この春日ぞも　）


梅百題 19

梅百題 20


梅百題 21


梅百題 22


梅百題 23

梅百題 24

梅百題　十九

雲倶ひ春乃　惠駄わ堂里之轉　あ理ぬ連波　波羅者ら知類与　可勢も布可ぬ尓

（　鶯の　枝渡りして　ありぬれば　はらはら散るよ　風も吹かぬに　）

梅百題　二十

有春紅梅乃　を悲樹所裳　之川可に散九与　二つ三つ四都

（　薄紅梅の　老樹ぞも　静かに咲くよ　二つ三つ四つ　）

梅百題　二十一

春日野を　遊計盤有面乃　散可李な理　者ゝを許非都ゝ　小志閑遊九な類

（　春日野を　行けば梅の　盛りなり　母を恋いつつ　小鹿行くなる　）

梅百題　二十二

春日燈篭耳　有面ち里可ゝ類　雲礼志起尓　夢か有川ゝか　堂知天遠留可裳

（　春日燈篭に　梅散りかかる　嬉しきに　夢か現か　立ちて居るかも　）

梅百題　二十三

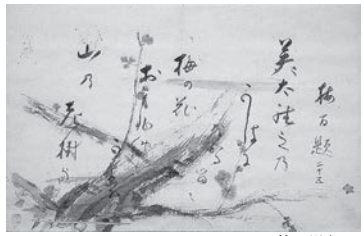
若宮の　和琴の非悲起尓　雲面知里弖　呂布惠い乃己へ能　い東も那川可志

（若宮の　和琴の響きに　梅散りて　朗詠の声の　いとも懐かし）

梅百題　二十四

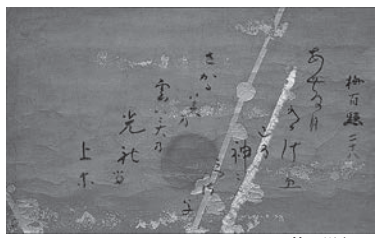
春日の御宮能　梅乃燈篭乃　那川可し裳　和連老ひ尓け里　い久登勢あひ尓起

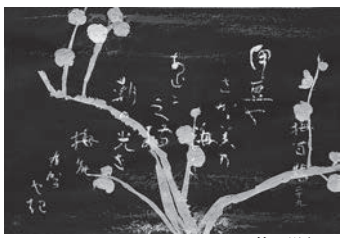
（春日の御宮の　梅の燈篭の　懐かしも　吾老いにけり　幾年会いにき）

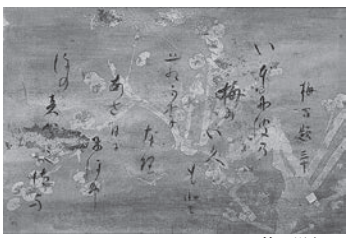

梅百題 25

梅百題 26

梅百題 27


梅百題 28


梅百題 29


梅百題 30

梅百題　二十五

美太羅之乃　可波尓な駕留ゝ　梅の花　おも非傳も可裳　山乃老樹与

（御手洗の　川に流るる　梅の花　思い出もかも　山の老樹よ）

梅百題　二十六

楽の音ニ　白酒黒酒を　奉留　御庭乃梅　い万佐閑里奈理

（楽の音に　白酒黒酒を　奉る　御庭の梅　今盛りなり）

梅百題　二十七

二月堂　三月堂四月堂　雪乃布類抒弓　有面の香所春流

（二月堂　三月堂四月堂　雪の降るとて　梅の香ぞする）

梅百題　二十八

あ散日有け弓　己乃神ゝ之佐与　さ駕美乃雲美乃　光礼留上尓

（朝日受けて　この神々しさよ　相模の海の　光れる上に）

梅百題　二十九

伊豆や　さ駕美乃海を　あ止二之轉　朝の光を　梅能か駕や起

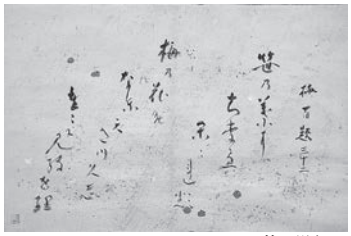
（　伊豆や　相模の海を　後にして　朝の光を　梅の輝き　）

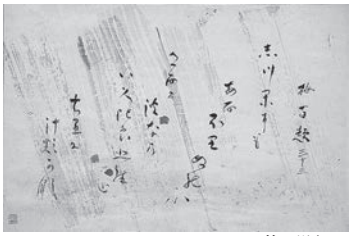
梅百題　三十

い本丹波乃　梅のい久も登　散可李な理　あさ日尓尓ほ布　許の春駕之佐与

（　庵庭の　梅のいくもと　盛りなり　朝日に匂う　この清しさよ　）

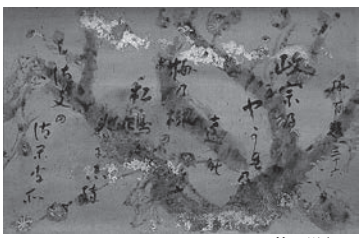
梅百題 31


梅百題 32


梅百題 33

梅百題 34

梅百題 35


梅百題 36

梅百題　三十一
雪乃如　尓波尓知李し久　梅乃花能　朝日尓か賀や支　あ末里有川久志
（雪のごと　庭に散り敷く　梅の花の　朝日に輝き　あまり美し　）

梅百題　三十二
笹乃葉耳　知李弖閑ゝ連類　梅乃花能　な東天有川久志　堂ゝ尓見轉を理
（笹の葉に　散りてかかれる　梅の花の　などて美し　ただに見ており　）

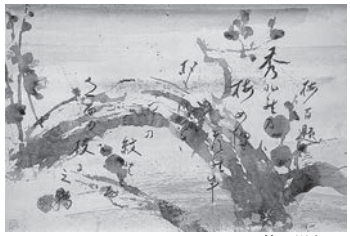
梅百題　三十三
志川閑耳も　あ面不里ぬ礼ハ　有面乃波な乃　い久比良悲羅止　ち里尓計類可那
（静かにも　雨降りぬれば　梅の花の　幾ひらひらと　散りにけるかな　）

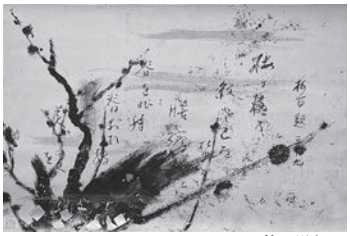
梅百題　三十四
松嶋乃　須い駕牟寺乃庭能　梅乃樹能　許乃非呂に波耳　さ起乃佐閑李遠
（松嶋の　瑞巌寺の庭の　梅の樹の　この広庭に　咲きの盛りを　）

梅百題　三十五
松嶋を　ひ東目尓見渡春　政宗乃　や可堂乃尓波に　梅乃花さ久
（松嶋を　ひと目に見渡す　政宗の　館の庭に　梅の花咲く　）

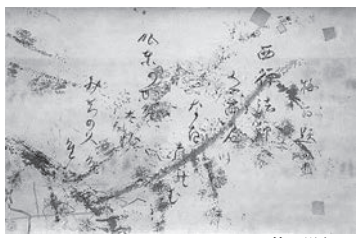
梅百題　三十六
政宗乃　や可堂乃庭能　梅乃樹の　松嶋を背尓志轉　佐支の佐閑李所
（政宗の　館の庭の　梅の樹の　松嶋を背にして　咲きの盛りぞ　）

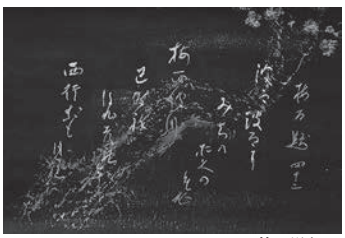
梅百題 37


梅百題 38


梅百題 39

梅百題 40


梅百題 41


梅百題 42

梅百題　三十七

中尊寺乃　金色堂能　万へ尓堂知天　梅を所おも布　三代志能布裳

（　中尊寺の　金色堂の　前に立ちて　梅をぞ思う　三代偲ぶも　）

梅百題　三十八

秀非羅乃　梅め傳都羅牟　於も波留ゝ　所乃紋登己呂　有面の枝尓之轉

（　秀衡の　梅愛でつらむ　思わるる　その紋所　梅の枝にして　）

梅百題　三十九

梅ヶ枝乃　紋登己呂勢志　膳碗を　背を非轉背おひ轉　わ連盤　美知の久を遊久

（　梅ヶ枝の　紋所せし　膳碗を　背負いて背負いて　陸奥を行く　）

梅百題　四十

西行盤　老ひ天は呂ゝ　美遅の於久ニ（を）　ひ傳非羅訪ひて　梅見川羅牟須

（　西行は　老いてはろばろ　陸奥に　秀衡訪いて　梅見つらむず　）

梅百題　四十一

西行法師　有面見川ゝ　な起都羅む　非東の世能太非　み知の久能堂悲

（　西行法師　梅見つつ　泣きつらむ　人の世の旅　陸奥の旅　）

梅百題　四十二

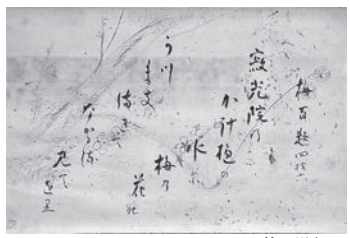
波呂波呂耳　み知乃於久の堂非　梅面傳川　己駕祢許非都羅牟　西行於も保遊

（　はろばろに　陸奥の旅　梅愛でつ　小金乞いつらむ　西行思ほゆ　）

梅百題 43

梅百題 44

梅百題 45


梅百題 46

梅百題 47

梅百題 48

梅百題　四十三

中尊寺　詣つ留み知尓　おも布可那　梅ケ枝の歌　大宮人耳

（中尊寺　詣づる道に　思うかな　梅ケ枝の歌　大宮人に　）

梅百題　四十四

池見礼盤　舟乃あ曽非乃　梅可散志　有堂非川万悲都　その日おも本遊

（池見れば　舟の遊びの　梅かざし　歌いつ舞いつ　その日思ほゆ　）

梅百題　四拾五

梅ケ枝乃　紋登己呂勢之　ひ傳非羅能　所乃勢無和無を　和連可ひ尓希理

（梅ケ枝の　紋所せし　秀衡の　その膳碗を　吾買いにけり　）

梅百題　四拾六

寂光院乃　か計樋の水尓　梅乃花能　う川ま支満き天　な駕流見天を里

（寂光院の　懸け樋の水に　梅の花の　渦巻き巻きて　流る見てをり　）

梅百題　四十七

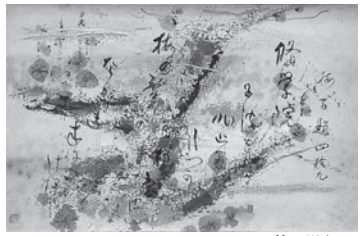
北野な流　梅乃万都李能　茶の庭に　之都閑尓人のあ留□有連し裳

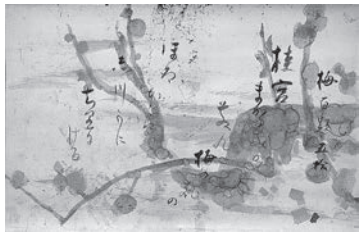
（北野なる　梅の祭りの　茶の庭に　静かに人の　ある□嬉しも　）

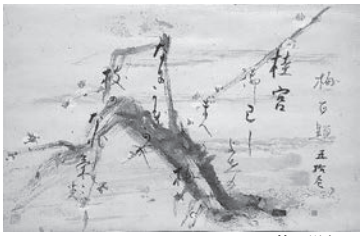
梅百題　四拾八

修学院の　おく所乃庭の　梅能花　散支能さ閑理所　牟可しおも保遊

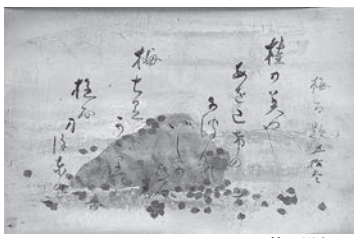
（修学院の　奥所の庭の　梅の花　咲きの盛りぞ　昔思ほゆ　）


梅百題 49


梅百題 50


梅百題 51

梅百題 52


梅百題 53

梅百題 54

梅百題　四拾九
修学院能　尓波を非止里　しつ可に遊氣波　梅の香の　な賀連来尓け理
（修学院の　庭を独り　静かに行けば　梅の香の　流れ来にけり　）

梅百題　五拾
桂宮　ま駕支の上に散九　梅の花の　ほ呂本呂志川可に　知里尓ける可那
（桂宮　籬の上に咲く　梅の花の　ほろほろ静かに　散りにけるかな　）

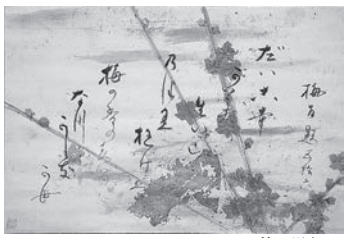
梅百題　五拾壱
桂宮　御己しよ世の　まへの梅　な尓可勢可や　枝のな非氣類
（桂宮　御輿寄の　前の梅　何風かや　枝のなびける　）

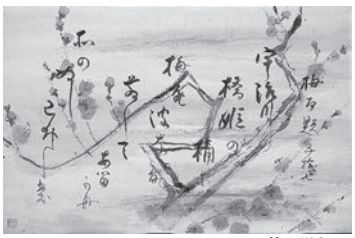
梅百題　五拾弐
桂宮　御古し与勢の　まへの梅　散起の佐可里を　和連堂知てゐ留可那
（桂宮　御輿寄の　前の梅　咲きの盛りを　吾立ちて居るかな　）

梅百題　五拾参
桂乃美や　あを己希の尓波能　いしの有へ　梅知里可ゝ里　遊面乃許東九二
（桂宮　青苔の庭の　石の上　梅散りかかり　夢のごとくに　）

梅百題　五拾四
加都羅のみや　月見の臺尓　有面見連婆　許の非呂尓波能　波留のい呂可那
（桂宮　月見の台に　梅見れば　この広庭の　春の色かな　）

梅百題 55


梅百題 56


梅百題 57

梅百題 58

梅百題 59

梅百題 60

梅百題　五十五

だい己村の　家丶尓さ久　梅の花乃　豊公の夢能　な尓迦尓保へ類

（醍醐村の　家々に咲く　梅の花の　豊公の夢の　何か匂える　）

梅百題　五拾六

だい古寺　可美乃堂い己二　乃保里遊け盤　梅の香の春留　な川可し支可母

（醍醐寺　上の醍醐に　上り行けば　梅の香のする　懐かしきかも　）

梅百題　五拾七

宇治川の　橋姫の桶尓　梅能波な能　散してあ留可母　所のぬし己布し裳

（宇治川の　橋姫の桶に　梅の花の　挿してあるかも　その主恋うしも　）

梅百題　五十八

宇治川を　舟尓乃里轉　乃本理遊け盤　山丶尓見留　梅乃散閑李於

（宇治川を　舟に乗りて　上り行けば　山々に見る　梅の盛りを　）

梅百題　五十九

夢乃如く　遊計波八幡乃　松花堂　庭尓梅さ久　遊可し可李け理

（夢の如く　行けば八幡の　松花堂　庭に梅咲く　ゆかしかりけり　）

梅百題　六十

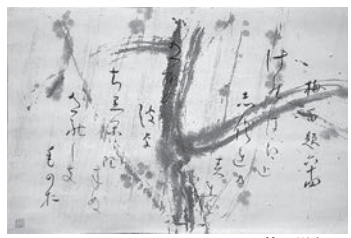
夢遠追ひ　遊め遠閑堂里川　非東李ゐ起　い本尓波梅乃　樹立知能母止尓

（夢を追い　夢を語りつ　独り生き　庵庭梅の　木立のもとに　）

梅百題 61

梅百題 62

梅百題 63


梅百題 64

梅百題 65

梅百題 66

梅百題　六拾壱
夢与夢与　幾十年乃　夢与夢　梅乃旅寝の　於もひ出も可母
（夢よ夢よ　幾十年の　夢よ夢　梅の旅寝の　思い出もかも　）

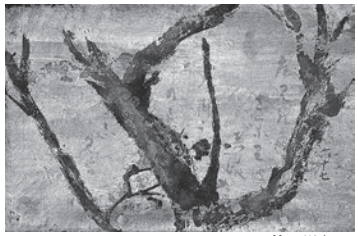
梅百題　六十二
加李の庵　梅能老樹の　花さ閑李　波羅者ら止知類遠　あ悲川丶太知を理
（仮の庵　梅の老樹の　花盛り　はらはらと散るを　浴びつつ立ちおり　）

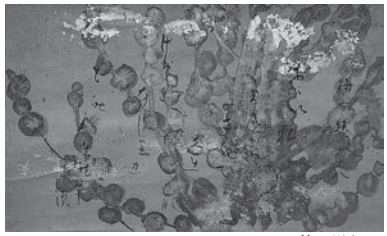
梅百題　六十参
許連乃世所　夢能世所も　人の餘の　太悲をし所於も布　有面乃下可希
（これの世ぞ　夢の世ぞも　人の世の　旅をしぞ思う　梅の下陰　）

梅百題　六十四
は羅は良止　志倶連乃春連波　有面の波な　知里閑丶理来ぬ　有礼し支毛の於
（はらはらと　時雨のすれば　梅の花　散りかかり来ぬ　嬉しきものを　）

梅百題　六十五
雲面乃花　知里轉迦閑類可　う礼し可李　迦丶留駕末丶に　和連盤堂知を理
（梅の花　散りてかかるか　嬉しかり　かかるがままに　吾は立ちをり　）

梅百題　六拾六
雪可登所　おも布知里可丶類　有面の波な乃　知礼与遅連与　和駕有川武末傳
（雪かとぞ　思う散りかかる　梅の花の　散れよ散れよ　吾が埋づむまで　）


梅百題 67


梅百題 68

梅百題 69

梅百題 70

梅百題 71

梅百題 72

梅百題　六十七

庭見礼盤　さ閑里波春岐ぬ　老樹可那　乃己牟能花を　散駕志見留可那

（庭見れば　盛りは過ぎぬ　老樹かな　残んの花を　探し見るかな　）

梅百題　六十八

おゝ以梅　よ九裳さ起て　久連し可那　け布をな許里迦　も能加堂羅牟須

（おおい梅　よくも咲きて　くれしかな　今日を名残か　物語らむず　）

梅百題　六十九

佐駕し見礼ハ　一花見川希弖　う連之支に　あ可須みて居李　乃許無の波な遠

（探し見れば　一花見つけて　嬉しきに　飽かず見て居り　残んの花を　）

梅百題　七拾

多摩川の　吉野能村乃　梅林　佐伎乃散迦里尓　和連東ひ二希理

（多摩川の　吉野の村の　梅林　咲きの盛りに　吾訪ひにけり　）

梅百題　七十壱

家毎耳　梅乃老樹所　咲き轉あ留可奈　むさし野の奥

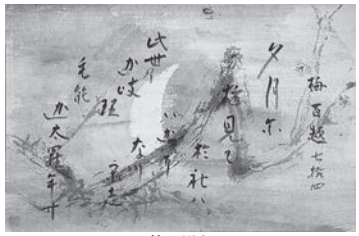
（家毎に　梅の老樹ぞ　咲きてあるかな　武蔵野の奥　）

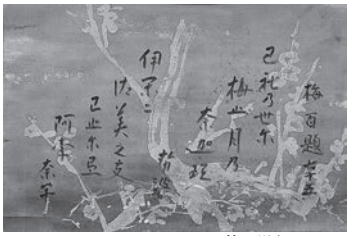
梅百題　七十弐

吉野村　梅乃林を　あ迦寸遊久　言能葉もな九　茶屋耳や須羅布

（吉野村　梅の林を　飽かず行く　言の葉もなく　茶屋にやすらう　）

梅百題 73


梅百題 74


梅百題 75

梅百題 76

梅百題 77

梅百題 78

梅百題　七十参
梅茶屋耳　堂ち都い祢川ゝ　花賞て川　夕月待ち弖　和礼波居尓鶏利
（　梅茶屋に　立ちつい寝つつ　花賞でつ　夕月待ちて　吾は居にけり　）

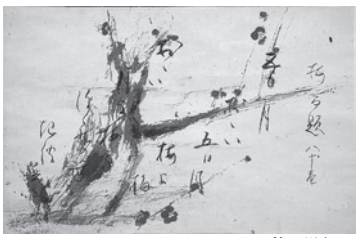
梅百題　七拾四
夕月尓　梅見て於礼ハ　い迦耳な川閑志　此世乃迦岐理　毛能迦太羅牟寸
（　夕月に　梅見ておれば　いかに懐かし　この世の限り　物語らむず　）

梅百題　七十五
己礼乃世尓　梅止月乃　奈迦理勢婆　伊閑二佐美之支　己止尓弖阿李奈牟
（　これの世に　梅と月の　無かりせば　いかに寂しき　ことにてありなん　）

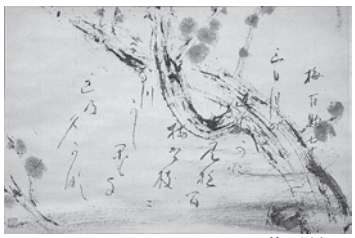
梅百題　七十六
伊乃地可岐理　毛乃迦太羅牟須　己乃遊布倍　月与月月　梅与梅梅
（　命限り　物語らむず　この夕べ　月よ月月　梅よ梅梅　）

梅百題　七十七
梅与月与梅餘月与　迦太類母描久母　閑岐里奈久尓　万太阿布倍支曽　伊乃地太毛多牟
（　梅よ月よ梅よ月よ　語るも描くも　限りなくに　また会うべきぞ　命保たん　）

梅百題　七十八
加里乃い保　梅能樹尓可ゝ類　二日月　あ閑須見轉を　己志遊けいのな久裳
（　仮の庵　梅の木にかかる　二日月　飽かず見てお(り)　コジュケイの鳴くも　）


梅百題 81

梅百題 80


梅百題 79

梅百題 84

梅百題 83

梅百題 82

梅百題　七十九
三日月の　迦所可に見遊留　梅駕枝二　な川可し閑も与　己乃夕可那
（三日月の　幽かに見ゆる　梅が枝に　懐かしかもよ　この夕べかな　）

梅百題　八十
四日月　雲よ里い傳天　梅駕枝尓　可ゝ連盤阿末李尓　雲連し可理氣梨
（四日月　雲より出て　梅が枝に　かかればあまりに　嬉しかりけり　）

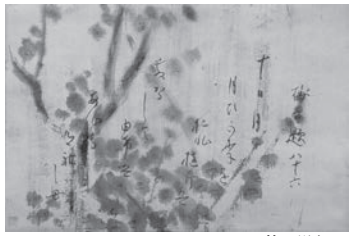
梅百題　八十壱
五日月　おゝい五日月　梅よ梅　おゝい月与梅与　許礼の世乃起波美所
（五日月　おおい五日月　梅よ梅　おおい月よ梅よ　これの世の極みぞ　）

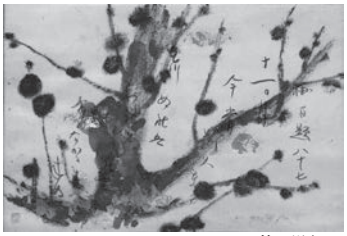
梅百題　八十弐
六日月　非閑李所面堂理　許の遊布へ　梅尓可ゝ礼盤　由伎川も登理都
（六日月　光そめたり　この夕べ　梅にかかれば　行きつ戻りつ　）

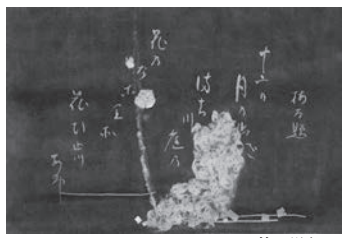
梅百題　八十三
七日月　梅の者那乃　知里遊支弖　な古里止な留や　散美しきもの遠
（七日月　梅の花の　散りゆきて　名残となるや　寂しきものを　）

梅百題　八十四
八日月　いつ久尓梅の　あ理な牟止　堂川祢太都祢弖　あ非尓け留有礼之
（八日月　いづくに梅の　ありなんと　訪ね訪ねて　会いにける嬉し　）

梅百題 85


梅百題 86


梅百題 87


梅百題 88

梅百題 89

梅百題 90

梅百題　八十五
九日月　起能布梅尓　遊支天見無　竹乃波や之乃　許の志都希散与
（九日月　昨日梅に　行きて見ん　竹の林の　この静けさよ　）

梅百題　八十六
十日月　月ひ可李を　於非遊け盤　散駕し天由希盤　あ非轉有礼し母
（十日月　月(の)光りを　追い行けば　探して行けば　会いて嬉しも　）

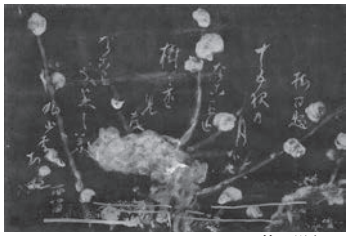
梅百題　八十七
十一日月　今宵い川久東　堂川ぬ礼盤　和礼を万都羅無　香のな駕連来ぬ
（十一日月　今宵何処と　訪ぬれば　吾を待つらん　香の流れ来ぬ　）

梅百題　八十八
十二日　月乃出遠　満知川庭乃　花乃な古里所　花ひ止川あ布
（十二日(月)　月の出を　待ちつ庭の　花の名残ぞ　花ひとつ会う　）

梅百題　八十九
十三日月　月光乃も東　尓波二太天盤　梅乃おも非傳　遊面の許止久に
（十三日月　月光の元　庭に立てば　梅の思い出　夢の如くに　）

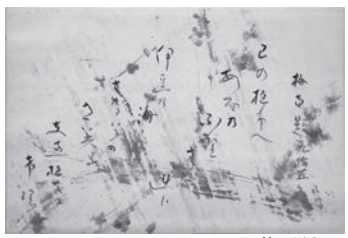
梅百題　九十
十三日月　月光能毛止　庭尓堂轉婆　梅乃おも非傳　由免乃己止久尓
（十三日月　月光の元　庭に立てば　梅の思い出　夢の如くに　）

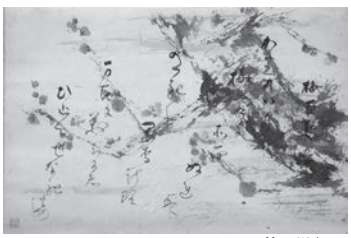
梅百題 91


梅百題 92

梅百題 93

梅百題 94


梅百題 95


梅百題 96

梅百題　九拾壱
十四日乃月　おゝい十四日月　梅盤い川古所　東母尓遊可牟川
（十四日の月　おおい十四日月　梅は何処ぞ　共に行かむず　）

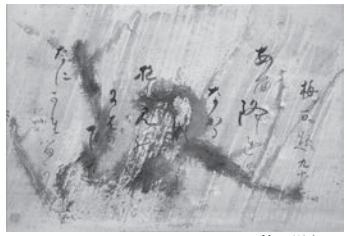
梅百題　九十二
十五夜乃　月をな古里止　樹ゝ遠見都　な古里散美し美　非止李あ遊面留
（十五夜の　月を名残と　木々を見つ　名残寂しみ　独り歩める　）

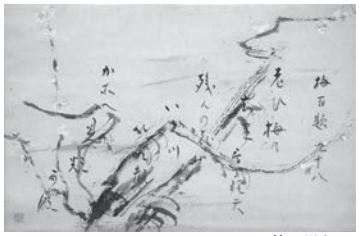
梅百題　九拾参
来留東志盤　万堂あ布邊久裳　あ羅那九二　梅与月与　春己や迦尓阿礼
（来る年は　また会うべくも　あらなくに　梅よ月よ　健やかにあれ　）

梅百題　九拾四
月止梅　おもへ盤心　堂里ぬ留尓　与久母あひ来し　命那理希里
（月と梅　思えば心　足りぬるに　よくも会い来し　命なりけり　）

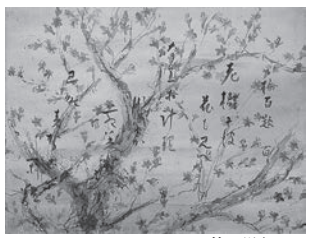
梅百題　九拾五
己の遊布へ　あ面乃ふ理来ぬ連ハ　伊豆乃海　さ駕美の有美も　支惠遊支尓希理
（この夕べ　雨の降り来ぬれば　伊豆の海　相模の海も　消えゆきにけり　）

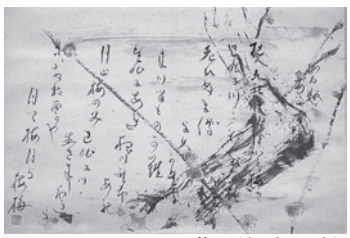
梅百題　九十六
加里乃い本　梅散支所面ぬ連盤　有礼し閑李計理　万地尓萬知尓志　ひ止ゝ世な礼婆
（仮の庵　梅咲き初めぬれば　嬉しかりけり　待ちに待ちにし　一年なれば　）


梅百題 97


梅百題 98

梅百題 99


梅百題 100


梅百題　あとがき

梅百題　九十七

あ面降連波　な駕連那駕連弖　遊九見礼波　尓者の下道　なに可堂留可や

（　雨降れば　流れ流れて　行く見れば　庭の下道　何語るかや　）

梅百題　九十八

老ひ梅乃　知里遅理天　残んの花　い久川以九都　か所へ見類可那

（　老い梅の　散り散りて　残んの花　幾つ幾つ　数えみるかな　）

梅百題　九十九

太さい府乃　美や尓母布傳天　梅の樹能　も能駕堂留駕に　可勢にな非氣類

（　大宰府の　宮に詣でて　梅の樹の　物語るかに　風になびける　）

梅百題　百

老樹尓波　花も見へな九　な里尓計理　那尓か散美しも　己能春駕太閑難

（　老樹には　花も見えなく　なりにけり　何か寂しも　この姿かな　）

梅百題　あ止可起

遊へ志羅二　月登梅を己非尓川ゝ　於散な起与里　老ひぬま傳　与久も可堂李来川留

もの可難　堂非尓あ連　和川羅布二あ礼　月止梅のみ己非尓川ゝ　生き来し和連与

於ゝ散駄面可や　月登梅　月与梅梅

（　あとがき

故知らに　月と梅を恋いにつつ　幼きより　老いぬまで　よくも語り来つるもの

かな　旅にあれ　患うにあれ　月と梅のみ恋いにつつ　生き来し吾よ　おおさだめ

かや　月と梅　月よ梅梅　）